

2015

ダンボールプレイハウス

Cardboard Playhouse

AD23 郡 智美
指導教員 竹内 明

1. 研究目的

次の世代を担う子供たちに、地球環境を考えた遊具を提供したく研究を始めた。

家の中でもダイナミックな遊びの楽しさが味わえる遊具の開発を研究の狙いとした。

2. 調査と分析

① 子供の課題点

- ・ひとりひとりを見つめる視点が大切にされる中で子供同士の「かかわる力」が弱まっている。
- ・子供を取り巻く社会的な環境の悪化から集団的な遊びや、身体全体を使った外遊びの楽しさが味わえなくなっている。

② ごっこ遊びとプレイハウス

- ・子供の遊びの一種でごっこ遊びがある。特に3歳児になると、まねっこ遊びからごっこ遊びに発展し役作りができる。
- ・ごっこ遊びはプレイハウスに取入れられる。
- ・プレイハウスは身体全体を動かす遊びや集団的な遊びに最適である。

③ 遊具について

- ・ほとんどの遊具が簡単に手に入るプラスチック製で地球環境に配慮していない。

④ 地球環境にやさしいダンボールについて

- ・ダンボールの原料のほとんどが使用済みの紙からつくられ、古紙が多く含まれている。
- ・清潔、安全、軽量、耐久性、独特の肌触りを持ち、加工がしやすい。

3. コンセプトの立案

「家の中で思いっきり遊べるダンボールプレイハウス」

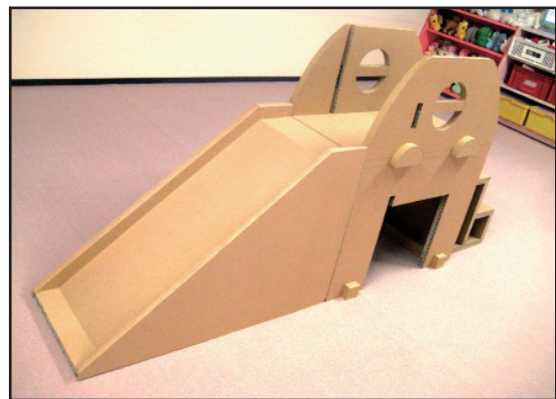
- ・親子で簡単に組立てられるダンボール製キット。
- ・組み合わせを変化させられる。
- ・3歳児が2～3人で遊べる。
- ・周囲の人間と交流を図り、遊びの創造性やおもしろさ、身体作りができる。

4. デザイン展開

今回、身体全体を使って遊べるすべり台とトンネル、階段をつくることにした。耐久性や軽量、価格、加工面からハニカムボードを使用した。形が変わったり、組み合わせによって遊びにバリ

エーションのある、今までにないプレイハウスを作りたかった。そのために耐久性のある構造を保ちつつ変形しても楽しめる形になり、なおかつホゾの位置やミゾの部分が組み立てた時の形に違和感無く作りこまれているかが一番苦勞した点である。簡単に組み立てられるようにするため、板状の平面的な形にし子供でも運びやすいようにした。安全性に配慮し、加工面をダンボールの表紙で覆い、滑り台の斜面の下部分に折り返しをつくり、滑ってもお尻が痛くないようにした。

5. 完成図



6. 結論

保育園で3歳児を対象に作品を検証した。その結果、子供が3人以上乗っても壊れず、かなりの耐久性があった。また、つかみ部分が子供の手にフィットし、変形して形が変わると子供たちはとても喜んだ。子供達の方から様々な遊びを思いつき遊びに移した。保育士の方や親御さんからも好評で、いろいろな組み合わせができたり、直接絵も描くことができるダンボール製のプレイハウスはとても面白いとの意見を頂いた。しかし、家に置くのは少々大きいことや、まだ危険だと感じるといった声が出た。また、すべり台の両端で支えている三角形の柱が、遊んでいる途中で外れることがあり、簡易的な組み方の見直しと加工面の安全性、サイズの検討が今後の課題である。

7. 参考文献

現代保育入門（諏訪 きぬ）
<http://www.playsafety.ne.jp>